

「今日の日はさようなら」、大研究

金子詔一

一、いつまでも

たえることなく

友達でいよう

今日の日はさようなら

また会う日まで

（明日の日を夢みて
希望の道を

二、空をとぶ

鳥のように

自由に生きる

今日の日はさようなら

また会う日まで

三、信じあう

よろこびを

大切にしよう

今日の日はさようなら

また会う日まで

〈誕生の謎と素朴な疑問〉

この流行りすたりの時代に、
来世紀までも、親子で歌い継ぎたい等と言う歌は、そうざらにあるものではない
せん。

どうやって生まれてきて、どう育てられてきたのか？

僕なりに分析し、僕なりに総括してみようと思いません。

多少、自慢話しめくかもしれませんか？

多少、長くなるかもしれませんか？

多少、専門的な話も出て来るかもしれませんが、

おゆるしをいただいで、書き進めてみます。

まず、よくある質問ですが、詩が先ですか？メロディが先ですか？

——というものがあります。

お金はいくら儲かりますか——という質問の次に多い問合せです。

言葉とメロディをバラバラに、切り紙細工のように作るものではなくて、言葉とメロディは一体となって生まれてくる作風です——とお答えします。

ところが実のところ、三番の歌詞だけは、後から勇気を出して・・・作つてのせたかもしれない？かもしれない？等と言うのは、50年も前のことで、自分でも記憶が明確ではありません。

勇気を出して・・・？と言ったのは、なぜか、こつぱずかしかつたのをよく覚えてるからです。

信じる——ということが、そもそも理系の教育を受けた一人の若者として、くすぐったい思いでした。まずは疑うことが若者の特権でもあり、新宿の広場では、フオークゲリラがヘルメットをかぶって歌っていた時代でもあります。

〈時代背景〉

アメリカからヒッピーが登場し、大人は信じられないぞ！キタナイゾ、汚れてるぞ？と歌っていました♪

「ダーティオールドマン」等というカタカナ英語が流行したり、権力に負けじと、ボブデイルン、ジョンバエズが登場してきました。ビートルズ旋風が吹き荒れる直前です。

そんな暴風雨のなかで大野重男さんのチームにより、「ハーモニー憲章」は作成されましたが、「すべての人の尊厳を信じて、信じ合う喜びを大切にしよう」というその呼びかけは、ナイーブな子供だましのようにも聞こえてくるのです。だから、僕なりに、三番の歌詞の登場には多少の勇気が必要でした。

一番と二番の歌詞だけは、すんなりと、言葉とメロディがひとつになって、口をついて生まれてきたのに、なぜ三番で苦戦したのでしょうか？

〈社会起業家、大野重男さんとの出会い〉

大野重男さんは、僕の高校時代の家庭教師でしたが、当時はすでに大学を卒業して、警視庁の少年課に勤務していました。(1966年頃)

少年課といえば、非行少年を補導したり、犯罪に手をそめないように指導したりする仕事です。

ハーモニイ運動というのは、少年課の仕事とは別に、大野さんが個人でボランティアで行っていた活動なのです。非行少年を取り締まるのが平日の仕事かもしれないですが、週末には、少年たちを励まし続ける活動をしていました。

「ハーモニイ憲章」

- 1、すべての人に対して、その尊さを信じよう。
- 2、すべての人に対して、その身になって考えよう。
- 3、すべての人に対して、我（が）をすてて思いやりをもって接しよう。
- 4、すべての人に対して、明るい面を見ていこう。
- 5、すべての人に対して、愛とまごころをささげよう。

人間関係のハーモニイが壊れると、犯罪が生れるといえます。調和した地域社会を子供たちのまわりに創りだすのは大人の責任だと考えた大野さんは、ボランティア軍団を組織していたのです。

色々な哲学や宗教を勉強していた大野さんは、教育者であり、啓蒙家でもあり、今風に言えば、非営利の社会起業家でもありました。

まず、お金がないからと言ってあきらめるな——！と青年たちを励ましました。技術がない、経験がない、学歴がない、家柄がない・・等と、簡単に人生をあきらめるな——と東京に集団就職でやってくる少年少女を励まし続けていたのです。

僕自身も迷える子羊のような青春まったただなかで、いまにも難破しそうな小船のようでしたが、大野重男兄貴の教えと励ましで、なんとか犯罪には手をそめずに歩いていたという感じでした。

〈調布市の田んぼ〉

調布市の田んぼの中の一家屋、8畳間ぐらいの集会室で車座になって、できたての“今日の日はさようなら”を若者たちと歌いました。三番まで、照れずに、素直に、歌えました。

大野重男さん率いるハーモニイ運動、創生期のひとこまです。たしかにうぶ声をあげたのは調布市だった訳です。

集会場所は、都内某所を転々としていましたが、なぜか、調布市の児童会館のミツシヨンに共鳴した大野さんは調布市の柴崎に住むようになっていたのです。

やがて、大野さんは、警視庁少年課をやめて、このムーブメントに生涯を捧げるようになっ
ていきました。

今、大人の頭で思い起こしてみると、一生食いつぶされることのない警視庁勤務を離れるなんて、狂気のさたです！

大野さんに何が起こったのでしょうか？

最近でこそ、ソーシャルエンタプライズ等という“社会起業家”が脚光を浴びていますが、戦後間もない当時の感覚からすれば、“本当にそれで食べるのか？”という感じでした。

〈ジャズの影響〉

一方、僕自身の事といえますと、化学科の学生でしたから、普通の就職も考えない訳ではありませんでした。

しかし、軽音楽部に所属して、黒人音楽に深くつき動かされ、映画「五つの銅貨」や「上流社会」に登場する、サッチモ ルイ アームストロングの歌声に人生観を根本から壊されるような衝撃を受けた一人の青年でもありました。

アフリカから奴隷として売り飛ばされてきた黒人の深い哀愁と、心の底をぶち抜くようなユーモアと、この世のものとは思えない生命力に圧倒され、全身を破壊されるほどに打ちのめされていきました。

その感動は、就職なんかくそくらえ——と言わんばかりに、僕の心の価値観を、ぶち壊していったのです。

しかし、僕の音楽の知識や技術は最低で、歌ひとつ歌えないオンチでした。黒人音楽に感動する心だけは人一倍大きく、人一倍深いものでしたが、

先輩バンドの楽器運びをしながら、やさしいフレーズをひとつひとつ手とり足とり教えていただくというキャンパスライフを送り、化学科の学生としては、落第寸前でした。この時、先輩から学んだ半音進行という、ジャズならではのフレージングが、後に「今日の日はさようなら」に特別な余韻と後味を残すことになるのです。隠し味といってもいいかもしれません。

今日の日はさようなら——は、大橋のぞみも歌い、今では幼稚園児でも知っています。

古い童謡だと思った！——という人もめずらしくありません。

しかし、普通の童謡には決して使われることのない、この半音進行のフレーズとは、一番の歌詞で言えば、

“友、だ、ち、で、い、よ、う”というところです。

二番三番の歌詞で言えば、

“自、由、に、生、き、る”

“大、切、に、し、よ、う”というカ所です。

先に述べてきた大野重男の哲学は、決してやさしいものではありませんでしたが、既成の概念にはないものを創り出すエネルギーに満ちていて、黒人たちの生命力にも通じるものでした。その創業の精神に僕は強く共鳴していたのです。大野さんの生きざまはハチャメチャで混とんとしているくせにギリギリのところ、絶妙なハーモニーを生みだしていました。つまり、生き様が実にジャジーで、そのユーモアの精神は黒人並みでした。歌謡曲にも浪花節にもない独特のテイストでした。それが、僕が大学院をやめる決断につながったのかもしれないかもしれません。僕は人生の新しいテイストを探し求めていたのです。

〈フォークソングの影響〉

「今日の日はさようなら」を世に送り出すもう一つの時代背景に、当時のフォークソングブームというものもありました。

たまたま、僕のいとこ金子洋明は、オヤジが赤胴鈴之介を作曲したという音楽一家の長男で、当時すでに、学生コンサートのプロデューサーとして才覚を発揮していました。そこに、当世一代の人気バンド、フロッキーズという四人組がいて、彼らが「今日の日はさようなら」を歌い、レコードをつくり、コンサートのフェアウェルソングとして定着させていったのです。

彼らの後輩に、当時まだ高校生だった森山良子もいました。彼女は献身的に、この若者の音楽集団を育てていたことも忘れられません。「もしドラ」に登場するバレーボール部の女子マネージャーみたいだったので。

森山良子は、いまさら説明するまでもありませんが、歌手としてだけでなく、作詞家として、作曲家として、エッセイストとして、そして体育会系の女子マネージャーとして、今日なお天才的な生きざまを見せています。

その彼女もまた、デビュー当時のレコードのB面に「今日の日はさようなら」を使いました。

さらに、世界のジョーンバエズが歌い、やがて教科書にものり、キャンペファイアの定番になり、人々の心に深く浸透していった訳です。

しかし、大切なことは、レコードはいつも裏面（B面？）で、レコード会社は宣伝ひとつしたことはありませんでした。

〈いよいよ人生の本番〉

卒業式や、送別会、

キャンペファイヤーに国際交流・・・

さまざまな場面で、人々は“又、会おう！”と言って別れていく時、その

“さようなら”に心のこもった命をふきこんでいきました。その一人一人のさわやかで深い思いが今日まで50年間続いてきたのです。

今、この歌の一番から三番までのテーマを再び並べてみると、

- 一、いつまでも友だち
- 二、自由に生きる
- 三、信じ合う喜び

どれも簡単ではありません。三つとも難問です？

73歳になる僕は今、この曲の本当の意味を深く考える人生の本番を迎えています。どんなに難しくてもあきらめないで、この難問と取り組んでいこうと思います。今から、ここからが本番です。

2015年1月 吉日

〈追記〉

それにしてもなぜ、大野さんは、「児童会館」だったのか？

大野重男さんは、警察庁少年課に勤務していましたが、健康な社会の構築には、少年少女よりさらに低年齢の子供たちを取り巻く環境をよりよいものにするのだと日頃から「子供会活動」を行っていた。(ハーモニイサークル)その記録が、当時の調布市の広報にも残されています。

大野さんの説明は、いたってシンプル、単純明快であった。

幸せな幼少期を過ごした子供たちは幸せになる!!

幸せな思い出を沢山持っている子供たちは、決して人を傷つけない!決して犯罪を犯さない!!——と、言うのです。

例えて言えば、森田宗一さんの体験記「流れは絶えず」、「ナイスは生きている!」に登場するような子供たちのことです。

反対に、今、現在、ナイフを持ったイスラム国の男と、今更どんなに對話を試みても無駄かもしれない?

イスラム国の子供たちも幸せな幼少期を送ってもらいたいものである。

日本にも、残念ながら、いじめや虐待で不幸な幼少期を過ごす子供たちが後をたたない。

そして、そこから、恐ろしい少年犯罪がこの国でも大量に発生している。

大野重男さん、森田宗一さん、内藤文質さん、——専門家各氏が、当時から指摘していた心配が残念ながら、現実のものとなっている。

少年だからと甘やかすな!ぶちこめ!!——と犯罪被害者は悲壮な声を上げる。三番の歌詞、

信じあう喜びは——今や、高度で高価で手の届かないものになってしまったのか?

イスラム国だけでない。黒人大統領まで生んだアメリカでさえも依然として困難な人種問題を抱えている。

ユニセフの広報活動には、お腹をすかせたアフリカの子供たちの写真が毎回登場して、私たちの心をとらえているが、実は日本の中にも寂しい日々を過ごしている子供の姿が少なくない。50年前、大野さんの場合は、もつともっと幸せな子供たちを必死で作りに出せと行動に出た。それが、「児童会館の理念」にとうじていたのだと思う。

今や、大野さんの理念は、世界中に広めなければならない。

日本だけを安心安全な国にしようとしても無理である。